

【寄稿】

大学における発達障害大学生支援

西村 優紀 美

1. 発達障害学生支援の現状

2016年4月、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が施行され、大学・短期大学・高等専門学校（以下、「大学等」）においても、「障害を理由とする不当な差別的取り扱いの禁止」や「合理的配慮の提供」が求められることとなった。独立行政法人日本学生支援機構（以下、機構）が2017年4月に公開した「平成29年度（2017年度）大学等における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告」によると、発達障害（診断書有）の人数は、4,150人で、このうち支援障害学生は3,023人であった。また、機構では発達障害学生の支援状況に関しては、診断書のある発達障害学生に加え、診断書はないものの発達障害があることが推察され教育上の配慮をしている者に関しても、発達障害（診断無・配

慮有）として調査している。その数は3,046人で、診断書がある発達障害学生の支援障害学生と合わせると6,069人となっている。

富山大学では、2017年10月現在の支援学生数は、ASD（自閉症スペクトラム障害）が60%、ADHD（注意欠如・多動性障害）が33%、複数の障害特性を併せ持つ学生は7%となっており、SLDのみの学生は0%である。

2. 障害学生に対する個別の支援

発達障害の多様なニーズに沿った合理的配慮の提供は、具体的場面や状況に応じて異なり、多様かつ個別性が高いことが特徴である。合理的配慮に関する発達障害学生の意思表示の困難さの多くは「実際の問題と、自身の障害特性を関連づけることの難しさ」と、「さまざまな状況を把握し整理して、自分の考えをまとめあげることの苦しさ」等、障害特性そのものに起因するため、合理的配慮の提供には「本人の意思決定過程を支援する」という考え方を採用する必要がある。一般的に、自閉スペクトラム症の人は独自のスキーマを形成し、その枠組み内で周囲の出来事を理解しようとするのがよくある。かれらのスキーマは、文脈からの影響を受けにくいことと、他者の視点が理解しにくいことが基底にあり、これに社会的孤立が加わると周囲の人から指摘されることもなく、修正される機会もなくなる。このような特性があ

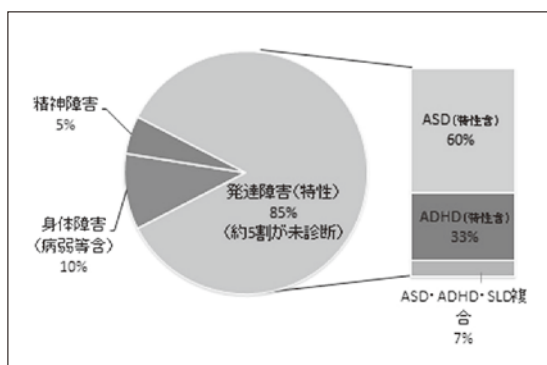


図1 富山大学における支援学生の障害種（特性）別割合
H29.10月現在

Yukimi Nishimura : 富山大学

ることを前提として、彼らの学びたいという願いを実現するための支援が行われていく。具体的には、困っている状況と一緒に整理し、何が問題で、自分には何ができるのか、あるいは問題の解消にはどのような配慮が必要なのか、さらにはその配慮内容が適切であったかどうかの振り返りを行う等、さまざまな観点から検証していくプロセスが、学生の意思決定を支える支援と考えることができる。

大学における支援の特徴は、発達障害学生の社会的コミュニケーションの障害や実行機能の障害を念頭に置いた「実行を支える支援」が支援の中核となる。

図2は、修学支援の一覧である。修学支援の基本は学生と支援者との週に一度の定期面談であり、ここでは履修状況を確認し、授業の出欠や課題提出状況の確認、スケジュールに関する確認が行われる。非常に根気のいるやりとりが毎行われるのだが、発達障害学生の場合、課題提出が滞ったことで授業に出られなくなったり、一度欠席してしまったら翌週から出席できなくなったりという、少しの躓きが修学上の問題に発展することが

あるので、地道な確認が重要になってくる。学生との面談では、教員との関係性に関わる問題も話題になることがある。学生が教員にきつく叱責されたと思い、途方に暮れている場合、支援者は学生がそう感じた気持ちを受け止めつつも、そのままの文脈で判断するのではなく、丁寧に周辺状況を聞き取っていく必要がある。

どのような時も、学生との対話では支援者がニュートラルな態度で学生の語りを聞き、学生の考えを整理していくという態度が必要であり、学生が支援者の態度や感情に左右されることなく、正確に語ることができるような配慮が必要である。このような対話の中で明確になった問題は、「学生本人の課題」として浮かび上がるのではなく、「取り組むべき課題」として共通認識され、外在化されていく。

「外在化」に関しては、White(2007/2009)は、外在化する会話の可能性を探求し、「外在化する会話は、問題を客体化することによって、内的理解の解毒剤となりうる」と主張した。外在化する会話により、人を客体化するのではなく、問題を客体化し、問題をアイデンティティから自由にす

修学に関わる支援	修学を下支えする支援
<ol style="list-style-type: none"> 1. 定期面談 <ul style="list-style-type: none"> - 履修調整 - 授業出欠、課題状況確認 - スケジュール確認 - 課題解決のための方策 - 教員への質問やアポの取り方 - 調べ方、レポートの書き方 2. 修学上の困難さへの対応 3. 配慮申し出に関わる検討 <ul style="list-style-type: none"> - 自己選択・自己決定 4. 学外活動に関する対応検討 5. 工夫したこと、配慮を受けたことへの振り返り 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 大学生活全般に関すること がらを話題にして話し合う <ul style="list-style-type: none"> - 体調への気づきや管理 - 生活リズム - 持ち物の工夫 - 食事、睡眠の管理 - アルバイト - サークルでの人間関係 - 身体的不調への対処法 2. 小集団活動 <ul style="list-style-type: none"> - コミュニケーション - 会話スキル 3. 体験の語り <ul style="list-style-type: none"> - 過去の体験の語り

図2 修学支援の内容

るという。

学生は対話の中で外在化された問題を、支援者と共に解決していくというプロセスを通じて、彼らの「問題への直面化」が実現されていく。

3. キャリア教育と就職支援

キャリア教育は体験を通じて自己と社会に関して多様な気づきや発見を得させることが重要であるが、仕事に直結する体験学習の場のみで行われるものではなく、修学を通して自らの役割の価値、自分と役割との関係、自分と社会との関係について認識していくものである。富山大学では、入学直前直後から支援を開始し、修学上の困りごとを解消していくプロセスを支援することを通して、青年期の成長モデルを基盤とした支援を実践している。支援者との定期的な対話の場は、学生にとっては自己と社会に関して多様な気づきや発見を得る場となっており、まさにキャリア教育の在り方と共通するものである。

発達障害のある学生に対する就職活動は、できれば修学支援と一体的に行うことが望ましい。発達障害学生の場合、「場面の変化」と「語る相手の変化」への適応に時間がかかることが多い。修学支援で語るとは、すべて自分自身に起きていることであり、自分を眺め、自分について語り、自分のことを整理していくプロセスで、いわゆる「自分について物語る自己物語」である。しかし、就職活動で行われることは、他者に評価されることを前提とした「自分自身を客観的に描写するための自己物語」という性質の語りが中心となる。つまり、就職活動では他者（企業人事担当者）の視点を意識しながら、他者の思いに応えるべく自分を語ることが要求されるのである。発達障害学生にとって最も難しい「他者視点」への気づきがここでは重要なポイントになるため、修学支援よりもより丁寧な支援が必要となる。

富山大学では、就職した卒業生に対しては、本人が希望すれば、フォローアップ支援も行っている。支援した学生が、どのように職場に適応し、

職業人として自立していくのかを知りたいという気持ちで始めたフォローアップ支援ではあったが、定着に至るまでの移行支援の重要性を実感した次第である。

4. おわりに

発達障害学生支援は、彼らの障害特性を念頭に置きながら、現状にどうチャレンジしていくかという、支援者の思いが重要であると考えている。支援者としてだけではなく、人として、発達障害学生の生き方に大きな敬意を払いながら、社会的自立に向け、問題に対して一緒に挑んでいくというイメージである。自信にあふれた彼らの姿を思い出しながら、支援がなくても十分に能力を発揮できる社会になってほしいと願っている。

【文献】

西村優紀美 (2015) : 大学における発達障害の学生に対するキャリア教育とキャリア支援. 障害者問題研究, 43(2), 91-98.

桶谷文哲 (2015) : 大学における発達障害者のキャリア支援 2. 大学から社会へ—発達障害のある大学生への社会参入支援. (梅永雄二編) 発達障害のある人の就労支援. 金子書房.

White.M.(2007):Maps of Narrative Practice.〔小森康永, 奥野光 (2009): ナラティブ実践地図. 金剛出版〕